

うしお

第 96 号

昭和 39 年 5 月

目 次

昭和 38 年度の海苔養殖状況	養 殖 部	1
定 置 観 測 (4 月分)	〃	10
漁場観測速報 (4 月分)	〃	12
一 般 漁 況 (4 月分)	漁 業 部	14
鹿児島島の漁業用語(その 4)	北 山 易 美	16
4 月のマグロ延縄漁況	漁 業 部	19
ハマチ種苗管理基地だより (山川基地雑感)	荒 牧 孝 行	21
奄 美 短 信	大 島 分 場	22
各 部 の 動 き	編 集 部	23
分 場 の 動 き	大 島 分 場	25

鹿児島市城南町 20 番 12 号

鹿児島県水産試験場

昭和37年度の海苔養殖状況

養 殖 部

1、施 設 数

第1表に示すように県下17ヶ所で266経営体が網ヒビ3446枚、女竹ヒビ58650本を建込んで養殖した。

漁場17ヶ所のうち本年はじめて試験的に養殖を始めたところが指宿市岩本漁協、恰良町漁協、鹿屋市高須漁協の3ヶ所である。

経営体数は地区別には多少の増減がみられるが、前年度(268)と大差なく、266経営体となっている。

網ヒビは出水で819枚増をはじめ各地区とも一般に増加し、前年度(2342枚)の47%増の3446枚となった。一方、女竹ヒビでは58650本と前年度の70%に減じ、年々減少の傾向がみられる。

採苗別でみると、網ヒビのうち人工採苗によるものが62%を占め、36年度のそれは28%、37年度33%から飛躍的に伸びている。しかし、人工採苗ヒビも地元で直接採苗するものは僅かに4%(134枚)で、残りの58%は熊本、佐賀県での採苗ヒビを移殖している現状である。

以上を総合すると、経営体数は前年同様であつたが、網ヒビ数が増加して僅かながら経営規模が拡大されたこと、又女竹ヒビが漸減して年々網ヒビへの転換がみられ合理化されつゝあること、更には、人工採苗ヒビが飛躍的に増加して経営・技術面において改良されつゝあること等がうかどえる。

2、生 産 量

第2表に地区別の生産状況を示した。

県全体の生産枚数は約300万枚で、前年(408万枚)の73%となつて減産となつた。しかし前年は豊作年であるので、過去3年間(35~37年度)の平均生産量に比べると大差ない。

作柄として網ヒビ1枚当りの平均生産量でみると、本年度は801枚となり、前年度の1482枚の54%、過去3年間平均を平年生産量とすると1090枚となり、本年度は平年作の73.5%の不作ということになる。

全国的な状況は、本年は関東、東北地区は未曾有の凶作となり、九州地区でも75%前後の作柄となつている。

生産金額からみると本年は全国的な不作の影響で後述のとおり価格が高騰し、豊作であつた前年の2996万円の36%増の4043万円と本県での記録を更新した。即ち、海苔1枚当りの平均単価は、36年度は5円73銭、37年度は7円32銭、本年度は13円46銭となつた。このことから海苔の需要が大きいことがうかがえ、今後は更に増産に拍車をかけるべきと考える。

第1表 地区別採苗別ヒビ数

単位：網ヒビ……枚，女竹ヒビ……本

地区別	経営 体数	天然採苗				人工採苗		合計		移殖ヒビ の採苗地
		地元採苗		移殖		地元採苗		移殖		
		網ヒビ	女竹ヒビ	網ヒビ	女竹ヒビ	網ヒビ	網ヒビ	網ヒビ	女竹ヒビ	
出水	132	648	42,500		16,000		1,454	2,102	58,500	佐賀
川内	7			65				65		出水
串木野	4					57		57		
鹿児島	26			202			532	734		熊本・佐賀
谷山	19			95				95		熊本
喜入	13	4		29		13		46		出水
加治木	16			35				35		出水
垂水	23			99		34		133		出水
小計	240	652	42,500	525	16,000	104	1,986	3,267	58,500	
野口	5	39					12	51		熊本・佐賀
東町	9	51	150			30		81	150	
長島	2			16				16		東町
下こしき	2			10				10		出水
加世田	1			2				2		出水
笠沙	2			4				4		出水
指宿	1			4				4		出水
あい良	3			9				9		出水
高須	1			2				2		出水
小計	26	90	150	47	0	30	12	179	150	
合計	266	742	42,650	572	16,000	134	1,998	3,446	58,650	

※ 漁協から報告された資料を基にした。

第2表 地区別生産量※

地区別	生産量 (千枚)				金額 (千円)	ヒビ1枚当 生産量(枚)
	くろのり	まぜのり	あおのり	計		
出水	1,246.5	811.4	226.9	2,284.8	31,022	948
川内	156.0		2.0	158.0	2,588	2,431
串木野	27.4	7.6	3.3	38.3	654	673
鹿児島	138.1	81.5	50.9	270.5	3,764	368
谷山	19.3	45.8	18.9	84.0	922	884
喜入	0.1	0.3	0.5	0.9	10	196
加治木	1.5	0.3	1.0	2.8	28	80
垂水	28.8	23.2	81.7	133.7	1,126	1,006
小計	1,617.7	970.1	386.2	2,953.0	40,114	822
野口				?	?	
東町	3.1	0.8	3.8	7.7	62	86
長島	2.5	2	1.5	6.0	69	375
下こしき	7.8	2.8		10.6	130	1,066
加世田				0	0	
笠沙				?	?	
指宿	0.3		0.2	0.5	7	127
あい良	1.0	3.0	0.5	4.5	43	500
高須	0.4			0.4	1	225
小計	15.1	8.6	6.0	29.7	312	240
合計	1,632.9	978.8	392.3	3,003.0	40,428.8	801

※ 漁協からの報告資料を基にした。

第3表 鹿児島県の年度別生産状況

年度	経営 体数	生産枚数 (千枚)	網ビビ1枚平均 生産量(枚)	備考
昭 30	116	432.7		農林統計
31	95	1230.5		"
32	190	1378.1	382	"
33	197	2199.2	733	"
34	230	934.8	467	"
35	256	2291.3	725	"
36	199	3039.8	1062	水試統計
37	268	4080.9	1482	"
38	266	3003.0	801	"

3、不作の原因

(1) 気象・海況

○水温(鹿児島水試定置観測資料……鹿児島港外側)

第1図に月別平均水温の変動を示したが、38年は異状冷水の影響のためか平年より低目を保っている。豊作年の37年度は1~4月は本年度よりも更に低温であった。

これからみて、38年度の不作が特に水温の影響によるものでないと考えられる。

○日射量(鹿児島地方気象台資料)

第2図の月別平均日射量の変動では本年度は、10~1月において、36~37年度(豊作型)よりかなり高い値を示していることがわかる。即ち、本年度の漁期は日射量が36~37年度よりも約20%も強かった。このことはノリの生育にかなり影響があつたのではないかと想像される。

○気温(気象台資料)

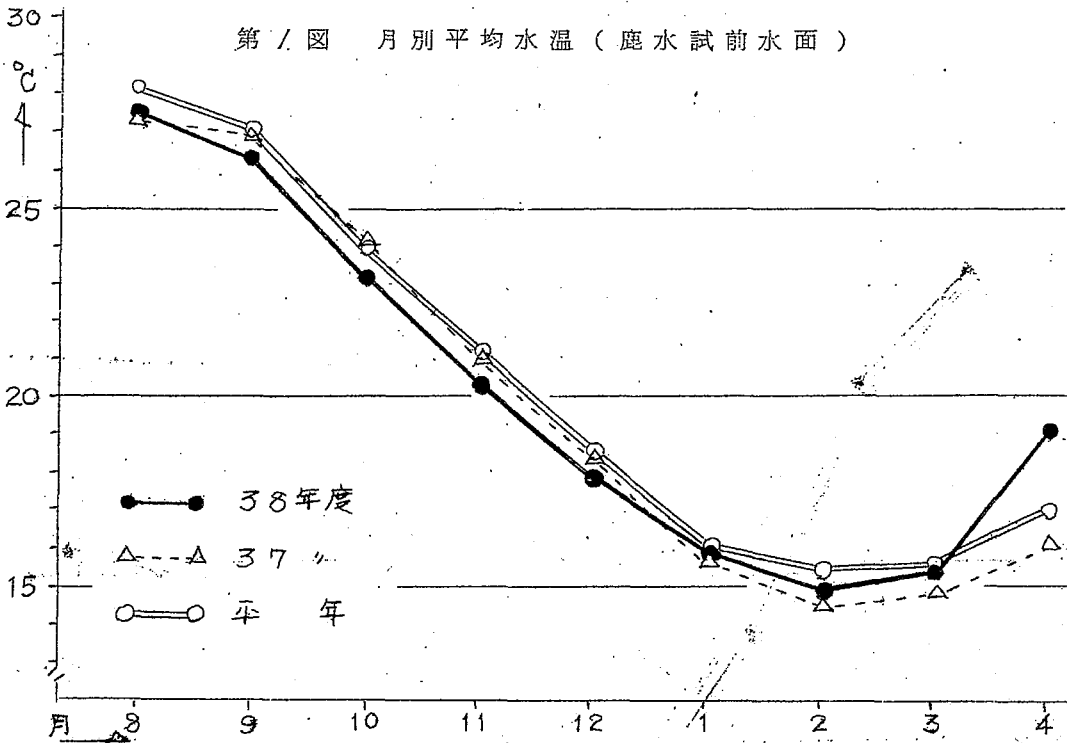
第3図に示すように本年度は10月に平年よりやや低目を示したが11~12月に平年並となり1月には平年より2℃高目となつた。2~3月は平年並。37年度は9~11月はむしろ平年より高目を保ち、1~3月に異常低温となつている。

○降水量(気象台資料)

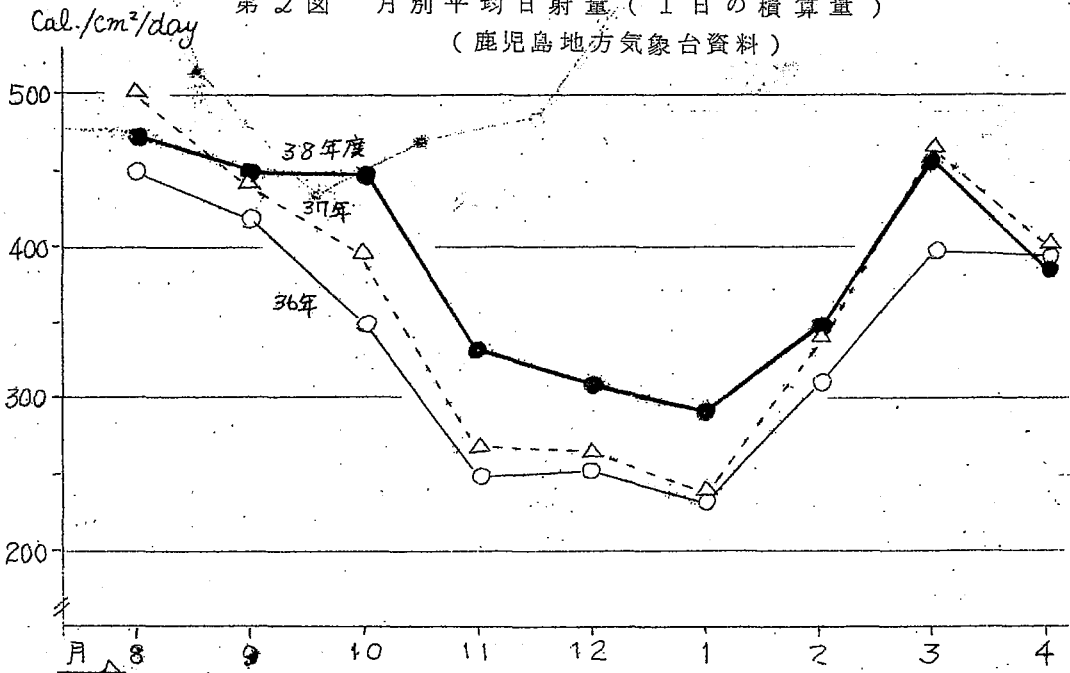
降水量の月別変動において本年度は平年に比べ特に異状は認められず、37年度より秋にやや少な目であつた。

以上のことから本年度の特異な現象としては日射量が強かつたことが挙げられ、従つて生産盛期の1月は気温もかなり高目となつてノリの生育に悪影響をもたらしたものと推察される。

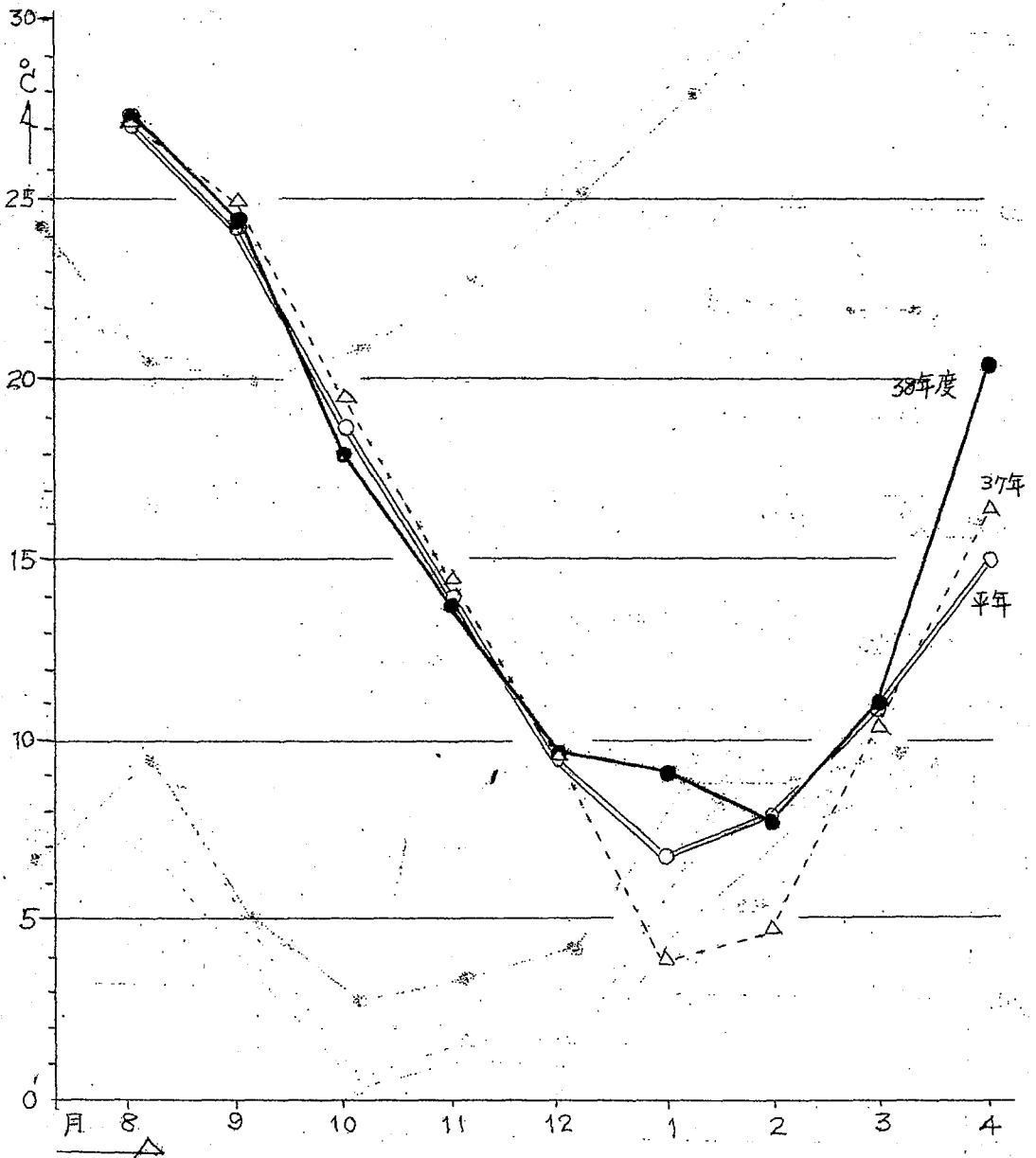
第1図 月別平均水温 (鹿水試前水面)



第2図 月別平均日射量 (1日の積算量)
(鹿児島地方気象台資料)



第3圖 月別平均気温（鹿兒島地方气象台資料）

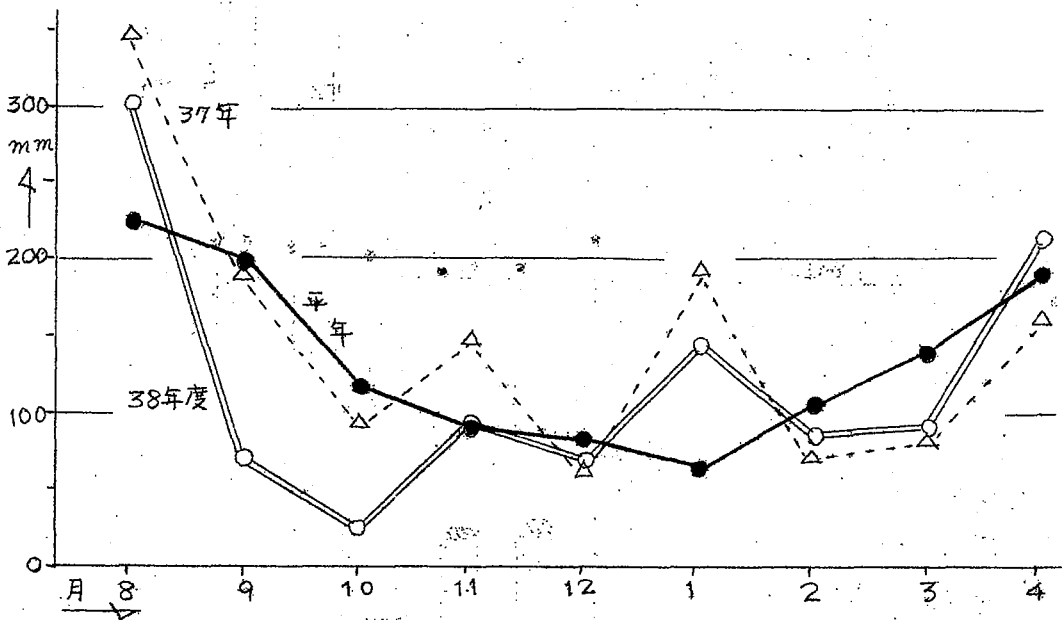


(2) ノリの病害

出水漁場では前年度同様11～12月にアカグサレ病が発生したが、これの防除対策を行つたところでは病害の蔓延をくいとめている。一方、鹿児島湾地区では12～1月にノリの流失がみられ、これは主に管理不充分によつてノリを軟弱に育て、一種の生理障害によつたものと考えられる。

以上をまとめると、本年の不作の主因は気象上の異状がノリの生育生理に悪影響をもたらしたものである。このことは例年の管理操作を行つたところでは失敗する傾向がみられ、日射量の強い時に対する技術が確立しておれば、かなり防げたものと思う。

第4図 月別降水量（鹿児島地方气象台資料）



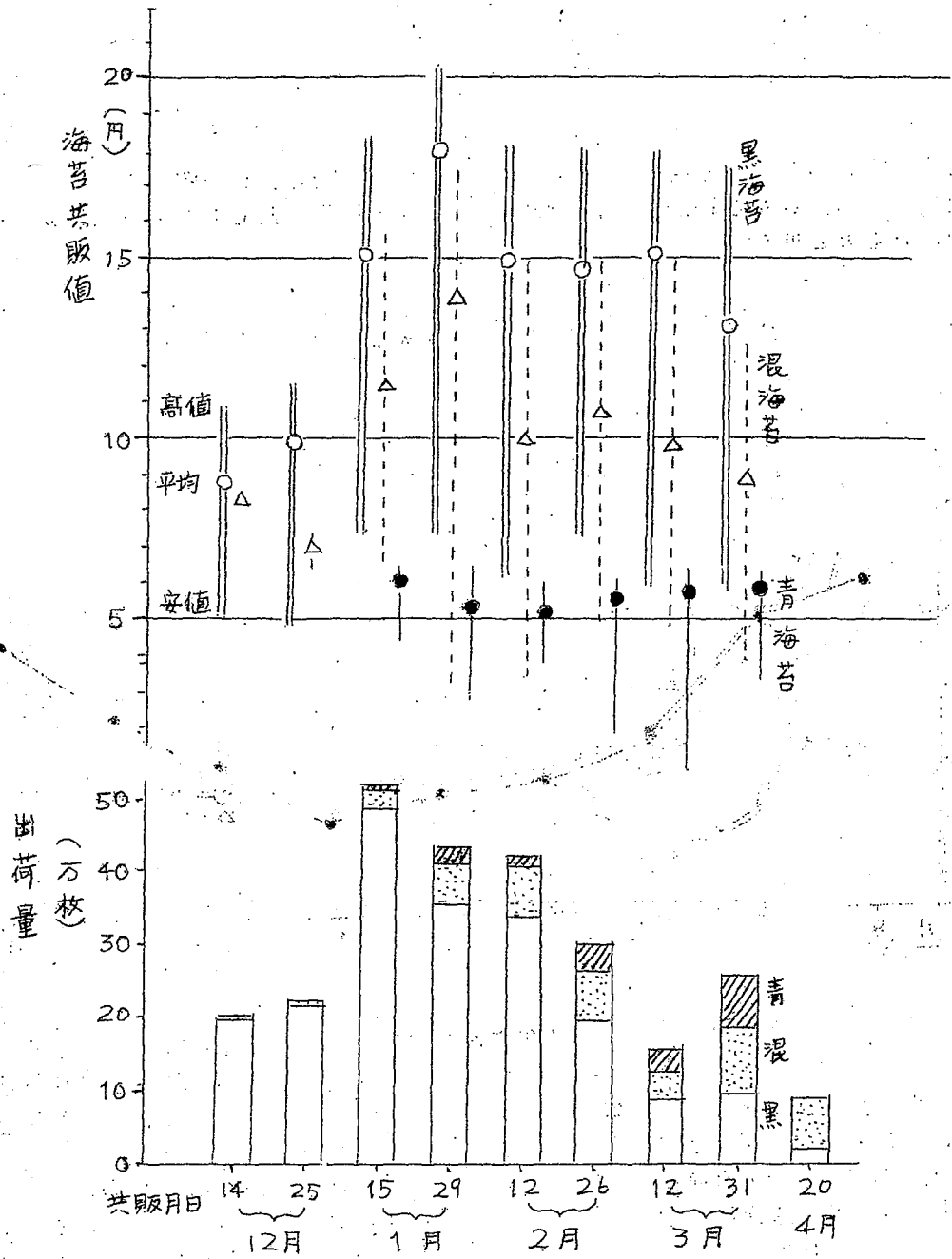
4、共販状況

県漁連主催による出水共販は36年度からはじまり3年目を迎えた。本年度は12月14日を第1回に4月20日まで9回行なわれた。本年度の総出荷量は2.67万枚と総生産量の8.8%の取扱量となり、36年度の2.8%、37年度の6.5%と次第に伸びてきている。

地区別出荷量は出水漁協が9.2%を占め前年度とほぼ同様の割合を示し、谷山漁協3%、鹿児島漁協2%、串木野1%、川内、長島地区の順となつている。37年度までは出水、鹿児島島の2漁協の出荷であつたが、本年度は上記のように県下各地から僅かながらも出荷されたことは共販体制が更に向上しつつあるといえよう。

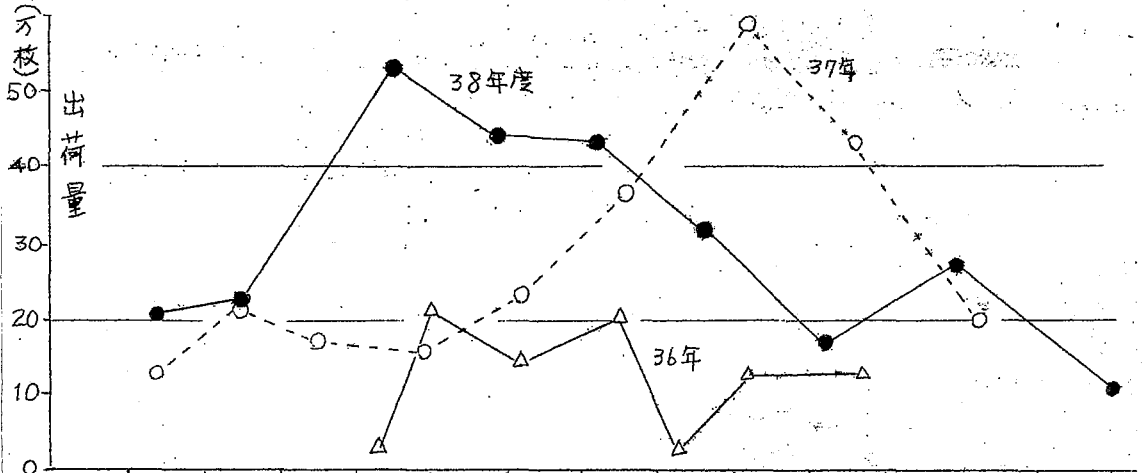
第5图

38年度出水共販実績

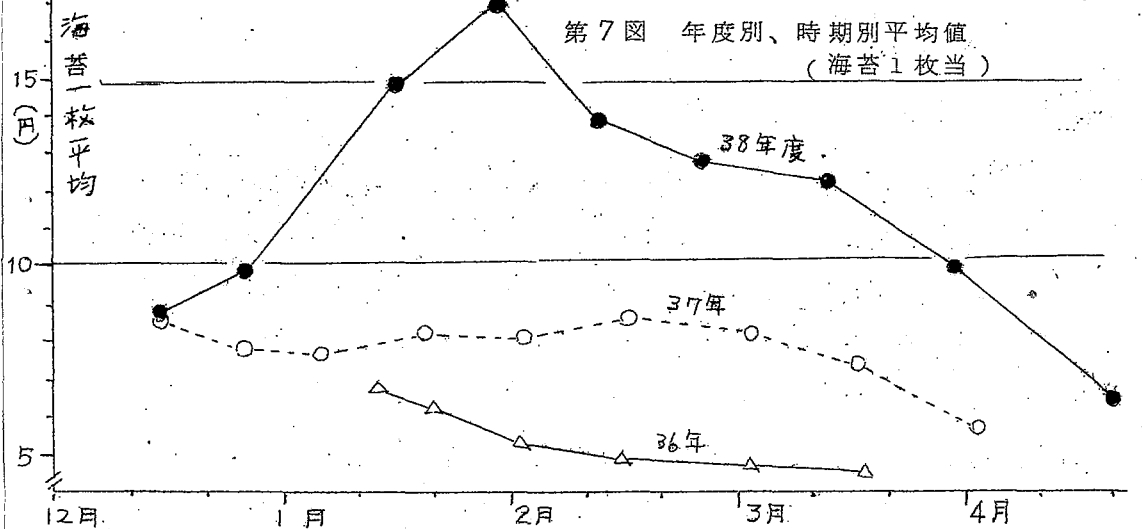


本年度の特徴として、海苔の単価が高騰したことで第5図で明らかなようにくろのりは漁期を通じて安値5円、高値20円以上もなり、まぜのりは3~17円あおのりでも1~6円という好況であつた。第7図の年度別、時期別の海苔平均値の変動で示すように、36年度は7円80銭にはじまつて4円50銭に終るいわゆる下降型、37年は8円70銭にはじまつて5円70銭に終っているが、漁期を通じてほと安定した平均値を保っている。それに比べ本年度は8円70銭にはじまり6円40銭に終る漁期間中は大きな変動を示し、1~2月の生産盛期に最も高値を生んだことは生産者にとって極めて有利であつたと思われる。価格が高騰した原因は主として全国的な不作が12月に伝えられたこと、近年加工ノリの需要が伸びていること等からであると考えられる。本年度の高騰は例外であつたとしても今後の海苔の価格に大きな影響を与えるものと考えられる。

第6図 年度別、出水共販出荷状況



第7図 年度別、時期別平均値 (海苔1枚当)



5、反省と問題点

本年度は養殖ヒビ数が増加し生産量の伸びを期待していたが、不作に終った。その主因は前述のとおり自然的条件の不順によるようであるが、養殖技術が未熟であることも一因と考えられる。養殖技術についてはノリの適品種の研究と本県の自然条件に合った管理技術の確立に努めており、機会ある毎に普及しているが未だ充分でない。今後も更に試験を重ねると共に普及面においても努力することが痛感される。

又、本県では天然採苗と、他県からの移殖ヒビに依存しているが、地元での人工採苗も普及すべきである。39年度からは出水漁協で共同培養場を設置し、室内採苗を行うような気運になつたことは心強い。これを機会に技術指導と共に採苗ヒビの自給体制へ転換を図ることが必要だろう。

養殖技術の合理化という面においてもこれから充分検討すべきである。即ち、労働力に対する適正養殖ヒビ数の限度、二次芽採苗の適期と抑制網の配分等ヒビの管理運用面の指導も肝心と考える。

共販体制は充実してきたが、未だ一部地区を主体に行われており、県下各地区が共販に出荷できるよう更に努力すべきである。

(担当 新村 巖)

定 置 観 測 (4月分)

養 殖 部

○ 旬別平均水温・比重(満潮時)

旬	水 温 °C				比 重 δ_{15}			
	平均	前旬差	前年同期差	平年差	平均	前旬差	前年同期差	平年差
上	17.11	+1.81	+0.95	+1.08	27.43	+0.32	+0.03	+1.96
中	18.15	+1.04	+2.34	+1.94	27.19	-0.24	+0.57	+1.60
下	21.54	+3.39	+5.44	+3.68	26.54	-0.65	-0.31	+1.40
月平均	19.03	+3.80	+3.02	+2.13	27.09	-0.15	+0.16	+1.69

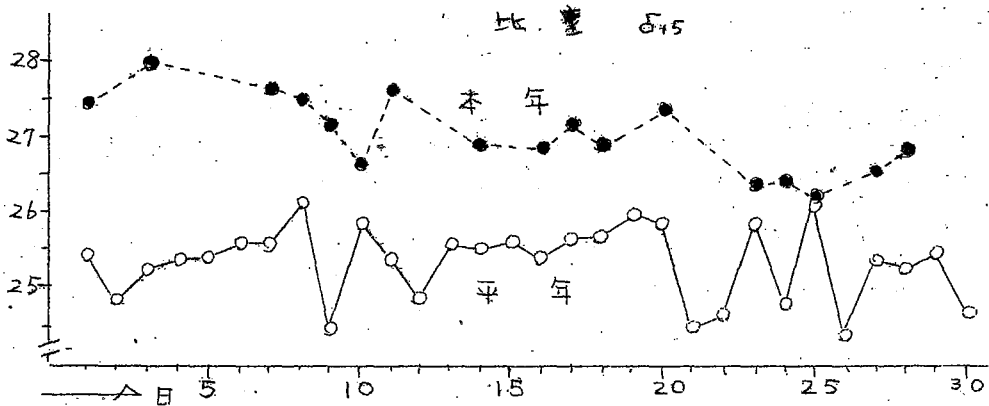
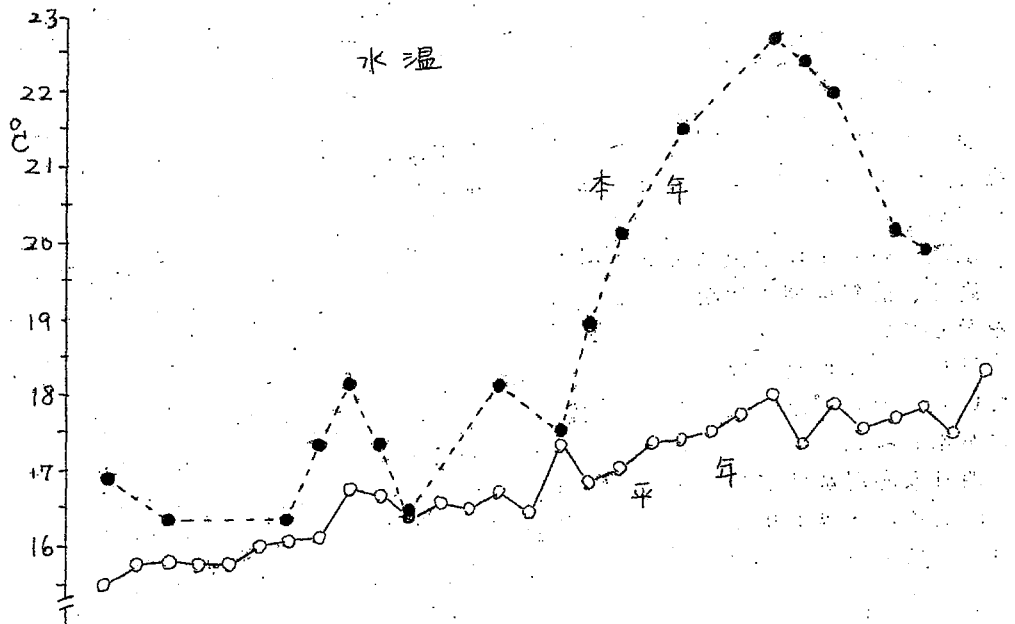
※ 平年値は1952~1963(1955, 1960欠)の平均

○ 水 温

16.4~22.8℃と大巾に変動し、特に中旬後半から下旬前半にかけて急激に上昇し、そして再び下降した。従つて前表でみるように平年差は上旬で1℃、中旬で2℃、下旬で3.5℃も夫々高目となつて、4月の水温が20℃台を示したのは1958年以来6年振りである。月平均水温も19℃と前月より3.8℃高く、平年値とも2℃高目を示し、1952年以来はじめての高温記録を示した。

○ 比 重

26.2~28.0と高域が続いている。旬平均値でみると、次第に比重が低下して行く傾向がうかゞえる。月平均値は、前月及び前年同期と大差ないが平年値とは1.7位と相変わらず高目を保つている。



漁 場 観 測 速 報 (4 月 分)

養 殖 部

I 旬別平均水温

旬 観測地 別	葛 輪		水 成 川		里	
	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
上 旬	15.4	15.0	18.6	18.2	17.8	16.7
中 旬	16.6	15.8	20.1	18.7	18.8	17.5
下 旬	17.9	17.3	19.6	18.6	21.0	19.3
月 平 均	16.6	16.0	19.4	18.5	19.2	17.8
前 月 差	+ 2.47	+ 2.14	+ 1.3	+ 0.86	+ 2.97	+ 2.53
前 年 差	+ 1.4	+ 1.4	+ 2.2	+ 2.2		

- 葛輪の月平均水温は16.6～16.0℃を示し、前月に比較して2.5～2.1℃高く、前年同期に比較すると15.2～14.6℃で最高最低共に1.4℃高目となっている。
- 水成川の月平均水温は19.4～18.5℃を示し、前月に比較して1.3～0.9℃高く、前年同期に比較すると17.2～16.3℃で最高最低共に2.2℃と高目を示している。
- 里村の月平均水温は19.2～17.8℃で前月より3.0～2.5℃高くなつてきている。前年との比較は下旬の記録しかないが16.5～15.8℃で今年下旬の方が4.5～3.5℃と非常な高水温を示している。
- 西日本海況4月下旬報によると全般に平年より暖かい所が多く黒潮及び対馬暖流域では平年より2度近くの高目が続いており、今後も全体に高目が続くとのことです。

II 漁 況
/ 葛 輪

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	
イサキ	10	178	1045	7	102	580	7	177	750	2375
タイ	10	178	330	10	148	240	10	223	275	845
タコ	10	178	535	10	148	1195	10	223	2375	4105
フグ	4	64	80	10	148	200	10	223	560	840
計		598	1990		546	2215		846	3960	8165

総漁獲8.165kgで、これを魚種別にみてもと、タコが4.105kgで50.3%で大半を占め、次にイツサキが2.375kgで29.1%、これにタイが845kgで10.3%、フグが840kgで10.28%を占めている。これを前月と比較してみると4.590kgと多獲され、これを魚種別にみてもとタコが3.800kg増獲され、又新たにフグが840kg水揚げされており、反面ではカサゴの漁事がなくなつてきているのが目立つている。

2 水 成 川

月・旬	上			中			下			漁獲量計
	有日漁数	延出漁船数	漁獲量	有日漁数	延出漁船数	漁獲量	有日漁数	延出漁船数	漁獲量	
イセエビ	7	23	159	9	41	302	3	10	53	514
瀬魚	1	3	22	1	5	35	3	10	65	122
コダイ	1	9	60	3	26	145	3	9	290	495
カツオ	4	31	462	4	29	690				1,152
計		66	703		101	1,172		29	408	2,283

総漁獲2.283kgで前月より1.151kg増収、これを魚種別にみてもと、カツオが1.152kgで50.4%と大半を占め、次にイセエビが514kgで22.5%、コダイ21.6%の順となつている。これを前月と比較すると、カツオの水揚げが1.152kgあつたことが目立つている程度で大差ない。又、これを前年同期と比較するとイセエビが171kg、コダイで136kgと増獲され、反面瀬魚では368kg減収となつており更にカツオの水揚げが除かれているので、総漁獲では1.793kgの減収となつている。

3 里 村

総漁獲47.554kgで、前月より37.771kgと多獲されているが、その主なものを魚種別にみてもとメジナが33.000kgと豊漁をみたこと、瀬魚が1.010kg、増獲されたのが目立ち、各魚種共に若干の増獲がみられている。更に今月分について主な魚種についてその比率をみてもとメジナが69.4%で大半を占め、次に瀬魚が17.6%、ブリが3.4%、エビが2.6%の順となつている。

五 村

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計	
	有 日	漁 船 数	延出漁 船 数	漁 獲 量	有 日	漁 船 数	延出漁 船 数	漁 獲 量	有 日		漁 船 数
キビナゴ	1	4	150	2	6	200	1	1	420	770	
瀬 魚	5	42	1,650	10	163	5,530	7	50	1,390	8,570	
エ ビ	4	36	230	9	144	850	5	47	160	1,240	
メジナ	4	7	8000				4	9	25,000	33,000	
チダイ	1	1	30							30	
ヒラス	1	1	100							100	
水イカ	2	2	65	3	6	135	8	11	578	778	
タバメ	1	1	700				3	6	378	1,078	
ブ リ	1	3	1,100	5	13	560				1,660	
赤イカ				2	3	90	2	5	120	210	
フ カ				1	16	40				40	
バ イ				1	2	30				30	
その他							2	5	480	48	
計		97	12,025		353	7,435		134	28,526	47,554	

一 般 漁 況 (4月分)

漁 業 部

○ 海 況

4月初旬の薩南海域の表面水温だけを見ると20℃の水帯は、大隅半島に接近し、種子島東方の100尋線では21℃と前月に比べ上昇がみられる。又、赤潮の出現は、鹿兒島湾中央部、大隅海峡、宇治群島にみられた。

下旬では、大隅海峡、種子屋久近海の水温の変化はないが、宇治群島～草垣列島近海では初旬より4℃内外上昇した。奄美大島近海では25℃内外で平年より2℃の高目を示した。

○ 東海サバはね釣

入港船は9隻で263トン、1隻平均30トン。漁場は前月と変わりなく魚釣島W20湊附近である。魚体は中サバ50~60%、小サバ40~50%。

○ 旋網

枕崎港の片手巾着は延85統1.570トン、1統平均185トン。主漁場は湯瀬、下り曾根で外に開聞沖合、種子島東、佐多岬沖、宇治群島。魚種は湯瀬、下り曾根で大サバ25%、中サバ60%、小サバ10%、豆アジ5%。種子島近海では中サバ30%、ムロ30%、ウルメ15%。佐多岬近海は豆アジ9.5%、ウルメ5%。

串木野港の双手巾着は延55統で596トン、1統平均11トン。主漁場はこしき島近海、外に野間池、宇治群島。魚種はこしき島近海で豆アジ90%以上、宇治群島では小サバ90%、小アジ5%、ムロ5%。

一方、東海中巾着は鹿児島港に18隻、約885トン水揚げした。1隻平均50トン。漁場はクチビノセ附近(473、462、516、260区)、魚種は大中アジ70%、小アジ10%、中サバ20%。

○ カツオ

※ 近海 (小型船 40\$以下)

枕崎港に115隻、704トン、山川港に152隻、825トン、平均121隻、5.7トンの漁獲、航海日数は5~8日、魚種の割合はカツオ50~70%、シビ30~50%。

魚体の割合はガラ80~100%、小判10%内外。

漁場は種子島E~SE25湊附近、横当島、白永良部、悪石島方面。

一方、鹿児島港にはトンボを目的としたものが8隻入港し36トンの水揚量、漁場は種子島~都井岬沖合。魚種組成はトンボ80~60%、シビ及びカツオ20~40%。

※ 遠洋 (大型船)

枕崎港41隻で1.117トン、山川港48隻で1.151トン、1隻平均25.5トン、航海日数は15~20日。漁場は宮古島、八重山、台湾。魚体は大10~20%、中10~20%、小50~60%。

○ 八田網

鹿児島湾内ではカタクチが主であるが、場所によつては豆アジだけが入網している。しかしながら魚価が安いいため控え気味である。

その他の用語

- あ ら し あらしというのは通常荒天のことであるが、この場合は夕なぎ、朝なぎが過ぎてソヨ風が吹きはじめるとアラシが来たと言う。即ち、無風状態で帆船がのたりのたりとしているとき心待ちしているソヨ風がアラシである。
- 雨風うじんまつ 台風ではなく突風に加えてドシャ降り、横雨なぐりで傘を持つていても用をなさないような荒天を雨風ウジンマツという。
- べ た な ぎ 油を流したような海とよく言うが小波ひとつない鏡のようななぎである。
- ま ず ん 日没になつて陸軟風が吹きはじめると前後をタマズンと言う。の を 呉 れ ん か ロープや綱を張るとき「たるませよ」という場合にノをくれんか、或はノをやらんかと言うが、大型船で言うスライキである。房総方面ではノナをくれという。
- お ら え ロープ類を伸ばす時やイカリを入れる時などロープはスルスルと出て行くがこれをもうよいから止めろという場合オラエよと言う。ロープの端を曲げて押えよということである。
- ひ つ て を 取 れ ロープの端を握れというのであるがピツテは引き手の意と思う。
- も え 船 もやい船である。二隻肩を組んだようにロープでつないだ場合、或は停泊のとき隣にいる船をモエ船と言う。
- も え を 取 れ 上記の場合、両船が離れないようにロープで繋ぐが片方の船に繋げというときにモエを取れという。
- 模 合 船 模合と書いてもえ船と読む。数人が出資して共同で造つた船を模合船と言う。鹿兒島では頼母子を模合と言う。
- わ さ ロープを掛けやすくするため一端を曲げて輪にするが、輪を作ることをワサを作れという。
- 海 軍 む す び 大隅東岸では結索というボーラインノットを海軍むすびと言う。志布志湾に連合艦隊が入港していた頃海軍の人たちがこの結びをしているのを見ておぼえたことから今もつて海軍むすびと呼んでいる。
- ず ば い 海底に落ちた綱やロープを探す時カギ型の金具を引き廻すのがこれをズバイを引くと言う。
- 船 を や ら ん か 停止している船を前進させよとその船以外の者が外部から言う場合、船をやらんかと言う。
- 船 を 戻 せ 対岸や沖合にいる船を元の船付場や、その人の居る所に返せ、こちらに返つてこいと呼ぶ場合に船を戻せと言う。

商売をする 物品を売ることが商売であるが、漁村の人は沖に漁に行くことも商売に行く、或は商売をと言う。

い で カツオ節製造のことを南薩地方ではイデと言う、即ちカツオ節製造を業としているとその職業はイデをしていると言っている。イデの語源は節を造るときはカツオを煮るのでこの煮るはゆでることになるのでエデをイデと呼ぶのである。

お や か た 親方と書く。網元とか船主をそこで働いている人はオヤカタと呼んでいる。

ふ な 子 カツオ船の乗組員を船子（フナ子）と言うところがある。

の い 子 のい子は乗子で船子と同じである。

せ こ 勢子と書くものらしい。八田網（四そう張）に従事している人をセコと言う。

せん ち り 定置網の従業員をセンチウと言う。船中と書くのかも知れない。

網 せ き 定置網漁場で聞くが網の責任者即ち網船頭である。網責ということだろう。

前 せ く 定置網の敷入準備としてガワヅナを作つたり、網を固定するイカリ俵を作るがこの敷入前の作業を前ゼクと言う。前ゼクは前細工ということだろう。

む ら ぎ ぬ 船には乗らずに陸上だけで網の破れを繕つたり、新網を漁網に仕立てあげる人をムラギヌ或はムラギンと言うが、大体労働年令の過ぎた古老の人が当っている。

餌 せ ん づ カツオ漁業は生き餌がなければならないのでどの船もそれぞれ餌の購入係を置いている。これを餌センツというのであるがセンツは船頭ということである。通常長年沖で働いてきた古老が当てられ餌の獲れる漁港に長期駐在している。

か し き 漁船の炊事員をカシキと言う。通常その船内の最年少者が当っている。

た な や ま 定置網漁業が大敷網を使用していた頃は漁場を抱いている山に魚見櫓を設けて見張っていたがこの魚見櫓を設置する山をタナ山といふ、櫓をタナと呼んでいる。タナは棚である。

ざつばんもん 外国からの輸入品を舶来品という時代があつたが舶来品に対して国産品をザツパンものと言つた。ザツパンはジャパンものというのである。

ご え だ 船 ゴエダは衆知のとおり石炭である。大正時代まではゴエダという言葉をよく耳にしたが石炭を運搬する船をゴエダ船と言う。

旗 を た て た 漁船が沖から帰るときもし大漁をしておると旗をたてる習慣があるが定置網では大漁旗を用意していないので平常よりも多く漁があつたり或は初ブリが獲れたりすると着物をぬいで棒にくくりつけて立てる。陸上から船の帰りを待つている人はこれ

を見て大漁があつたと知るのであるが、こゝでは詹物を纏つて立てゝも旗をたてたである。

種子島のザコ

鹿児島ではイワシ、アジ、サバなどの1尾扱いにされない俵少のものを総称してザコというけれども、種子島ではキビナゴだけをザコといつてその他は大小によらず小さくてもイワシはイワシ、アジはアジと称している。

乗前が悪い船

設計の拙づさでよくローリングをする船があるがこのような船を乗前が悪い船と言う。ちよつとの事でローリングするので乗りにくいということだろう。

おびく

小さなアジやイワシはホウチヨウをかけられないので指先きで開いて塩干やさしみにするが指だけで開くのをオビクという。熊本県の牛深市でもオビクといつている。

やりだし

カツオ船とか突棒船はミヨシが前方に突出しているが、この突出した部分をヤリダシと言う。

かた

カタは形で漁がないときカタも無いといふ、また定置網でブリが1〜2尾獲れるとカタがあつたから明日あたりは獲れるぞと言う。

たて

漁村では魚の頭や内臓を肥料にするため便所に放りこんだり堆肥の中に混ぜたりする。肥料としての効力はあるかも知れないがその臭気は大変なものである。この魚肥をタテと言う。

いちを入れる

大敷網は魚が入り易く、出やすいという網であつた。そのため大漁の時は1回に全部を取り上げられないので魚捕部の所で別に用意してある網袋に移し、活かしておいて翌日取り上げていたがこの網袋をイチと言う。

〇〇漁場はイチを入れたといふと大漁をしたことでもある。イチは格別丈夫にできているけれども長期間使用しないと中がむれていてそれに気づかず折角のブリを2千も3千も逃がすことが時折あつた。

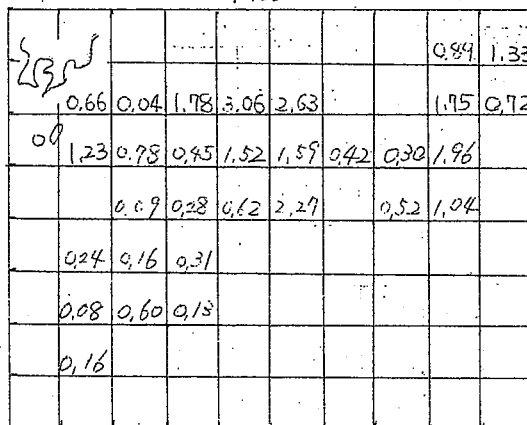
(県漁業公社専務取締役)

4月のマグロ延縄漁況

漁業部

4月にはいつてビンナガの釣獲率の前月の約5分の1に落ちたためにキハダの
 殆頭にも拘らずカジキ、マグロ類の釣獲率は前月の約3分の1にとどまつた。
 然し、前年同期に比較すれば50%程度上廻っている。

年次		38年		39年	
		釣獲率	組成%	釣獲率	組成%
マグロ類	ビンナガ	0.50	51.0	0.74	48.7
	メバチ	0.05	5.3	0.03	2.2
	キハダ	0.05	5.2	0.36	23.9
	クロマグロ	0.11	11.3	0.08	5.5
	計	0.71	72.8	1.21	80.3
カジキ類	メカジキ	0.02	1.8	0.04	2.8
	マカジキ	0.06	6.3	0.08	5.7
	クロカジキ	0.00	0.4	0.00	0.2
	バセウカジキ	0.04	4.5	—	—
	計	0.12	13.0	0.12	8.7
マグロ、カジキ計		0.83	85.8	1.33	89.0
サメ計		0.13	14.2	0.16	11.0
総計		0.96	100	1.49	100



第1図 ビンナガ釣獲率

135°

S/N							0.03	0.14
		0.02		0.04			0.07	
0.0		0.36	0.07	0.18	0.09	0.03	0.07	
		0.09	0.11		0.10	0.05	0.10	
	0.24	0.06	0.11					
		0.22						

30°

第2図 クロマグロ釣獲率

135°

S/N							1.48	2.09
		1.83	0.82	2.17	3.33	3.09	2.44	1.24
0.0		3.52	1.54	3.18	1.92	2.14	0.81	0.44
			0.64	0.79	0.95	2.45	0.30	0.93
	0.80	3.65	1.07					
	0.33	0.94	0.84					
	1.49							

30°

第3図 マグロ・カジキ計的獲率

ハマチ種苗管理基地だより
(山川基地雑感)

※ 今年もハマチ種苗、採捕期になり4月22日から、カツオ節製造の町として名高い山川港に種苗管理基地設定をはじめ、試験船「かもめ」は25日から採捕に乗り出した。

佐多岬、開聞岳を玄関に大隅海区、西薩海区と連日白波をけつて流れ藻を求めている。

亦、牛根、垂水地先の自己採捕船の出漁もあつてか、例年になくにぎやかな感がある。

※ 私達駐在員(水試職員2名、牛根、垂水漁協職員各々1名)は東の空が白む頃、満載したカツオ船のエンジンが港いつばいに響き渡ると同時に1日が始まる。6時前、ハマチの餌料バケツを片手に漁協水揚場前を通る。

水揚げされたカツオは所狭しと並び、カゴを両手に運搬する人、せりをする人、カツオ中心に人々はそれぞれ動き、活気がみなぎっている。

かつおの腹 プリ仔居ぬかと 魚市場

ふとこんな感じがして立ちどまつてしまう。

※ 正午過ぎになると何時の間にかカツオは手車や自動車に運ばれ製造工場にいつてしまつたらしく、だぶつ広い揚げ場のコンクリートはところどころに水溜を残して、風だけが「スウー」とぬけて行く。朝の光景とは全く反対にカツオ船も出漁したらしく何か寂しい気がする。

※ ハマチの投餌は1日6回。風すぎから第4回目の投餌作業にかゝる。これが終ると私達駐在員にとつて1日で最も緊張した時間——「かもめ」からの入電が待っている。空バケツ下げていそぎ足に無線室えかけ込む。

吉報を 今日とは祈る プリ仔捕り

※ 何だか本日1日の終りが間近にせまつて来たような気がする。大急ぎで生簀網の準備をすませて「かもめ」の入港を待つ。

19時、1日の仕事も終り、連日のウツウシイ雨に

五月雨や 夕餉かざる さつま酒

※ 以上が山川基地1日の状況です。俳句とも川柳ともつかぬつたない句をおりませながら基地だよりを終わります。

調査部山川基地駐在員 荒牧孝行

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

※ 四季変化にとほしい奄美島には、何時ともなく春が訪れ、道行く人も半袖や肌シャツ姿が多く見られる。街では3月下旬から扇風機が廻り、アイスクャンデーも売り出された。

その暑さにつれだつてかハブ公もふ化し、冬眠中のものもそろそろ這出し我が世の春を歌いだした。

先日、名瀬港に山積みされている本土向出荷用の蘇鉄の根元に生れたばかりのハブが3匹たわむれていたそうである。船待ち疲れの息抜きに腰掛けようものならハイゴツツアンで一かみされたろう、全くこわいことである。小学校の頃机の中に本を入れようとしてかまれた生徒、神社で鬼ゴツコして兄弟二人とも同じ一匹のハブにかまれて死んだ生徒等、数、数話はずきないが、神代の昔から、医学の進歩した現在でもハブの恐怖にさらされている。今改めて、ハブによる咬傷患者等調べて見ると、棲息数推定30万匹、明治時代の咬傷率230人、死亡率、11.5%、昭和38年の咬傷率223人、死亡率1.3%と大体一年平均230人前後の打率らしい。死亡率の減少は、血清液等片田舎迄行届いているせいだろう。その予防には先手必勝、ハブより先にハブを見付けることであろう。

※ 本土歌謡界でヒットした奄美ブームも漸く下火になりつゝある昨今、スピード時代にはテンポの早い島唄を楽しもうと言うことで悠長な島唄の中でも最もテンポの早い曲だけを取めたレコードが売り出された。赤ヒゲ踊り、渡シャ節すばやど節、稲すり節の四曲ドーナツ盤何れも島一番の歌い手によるものだけに、ハーレーの島言葉の分らない人でも聞いているうちに踊り出すと言う唄である。ヒットした、島育ち、永良部百合の花等、私達が小さい時から口ずさんだ唄であるが奄美には、まだまだかくれた唄が多い。次の唄も私達がニセ時代に歌われたものである。

波にポツカリ浮くような島は、島はよい島、無尽の宝庫

唄と情けの、唄と情けのパラダイス、サノサツサー

永良部麓の水田の稲は、島の娘の情によりて、

年にお米が、年にお米が二度とれる、サノサツター

その他、今女物語、カンツメ節、儀志直節、野茶坊節等の民謡も沢山あります。が又次に書く事として今回はこれでペンを止めます。

分場長以下皆職場に励んで居ります。本土の皆様御健勝祈ります。

(Y S)

※ 加工指導 長島地区粒うりに加工講習会を実施。

○ 調 査 部

※ プリ仔採捕蓄養試験

標記試験実施の為4月中旬山川港内に施設設置し26日から事業を開始した。予想では相当量の採捕が見込まれたが開始早々試験船の機関故障、天候不順等で未だ6,000尾程度の採捕状況であり、昨年の同期より不漁である。

※ 魚類蓄養試験

プリ仔採捕蓄養試験と前後して、前年と同様牛根の試験地において海産アユ、トラフグの飼育試験を実施しているが何れも種苗の入手前の管理が悪かつた為斃死するものが多く、これが防止対策に腐心している。

※ 水質調査

串木野市の依頼により、同市にある某工場の排水と近接している養鰻池との水質調査を行ない目下分析中。

○ 養 殖 部

※ イカ類のふ化飼育試験

種苗生産試験の一つとして4月28日日吉町地先で採取されたカミナリイカの卵及び5月2日に鹿児島市漁協地先に投入されたイカ柴について甲イカ類(種名不詳)水イカの卵を5月4日当実験室の水槽に移し、通気並びに5日毎の換水を行い、これのふ化飼育試験を実施中である。

※ ワカメ技術改良試験

4月27日～28日、5月12日～14日 出水郡東町で養殖されたアオワカメ、ヒロメ、ワカメを採取、又、5月4日には鹿児島湾でもワカメを採取、これらの採苗を行うために目下当実験室において室内培養中である。

